

11QPs^aの外典讃歌三篇

松田, 伊作

<https://doi.org/10.15017/2332690>

出版情報 : 文學研究. 76, pp.81-104, 1979-03-31. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

11QPs^a の外典讚歌三篇

松 田 伊 作

解題 11QPs^aとは1956年にクムラン第11洞穴から発見された紀元1世紀頃のものと思われるヘブライ語の巻物の一つに、これを開卷、校定した J. A. Sanders が与えた記号である。クムランとは、死海北西岸の Wadi Qumran (クムラン涸溪) 一帯の地名で、第11洞穴とは、この岩山にうがたれている無数の洞穴のうち、1947年に最初に古写本群が発見された洞穴を第1とし、以来学術調査隊やアラブ遊牧民によって同種の遺物が発見された洞穴を順に番号付けたもので、第11洞穴の発見はやはり遊牧のアラブ人によるものであった。ちなみに、いわゆる「死海文書」とは、狭義ではこのクムラン洞穴群から出た写本群を指すが、広義では、クムランでの発見を契機として、北はエリコ北方約13^{キロ}の Wadi-d-Daliyah の洞穴から南は死海西岸の Wadi Murabba'at, Nahal Havar, Masada に到る各地で出土した文書の総称である。さてクムラン第11洞穴は、クムラン第1洞穴の北北東約650メートル、クムラン廃墟 Khirbat Qumran の真北約1900メートルの地点に位置する。クムラン廃墟は、踏査の結果、クムラン文書の所有者であったユダヤ教エッセネ派の一集団が、おそらくその本拠地として、前2世紀中葉から後70年頃まで、一種の修道生活を営んでいた場所であったろうと推定される。その律法的・敬虔主義的な生活のさまは第1洞穴から出た「共同体の規律」(1QS) 等からうかがうことができる。これらは既に旧聞に属することである。もう一度11QPs^a という記号に帰ろう。Ps はいうまでもなく今日のいわゆる正典詩篇 Psalms の略号であるが、実はこの巻物の内容を Psalms と同定することには問題

がある。というのは、この巻物に収められている詩の大部分はたしかに従来からヘブライ語詩篇として知られていたものであるけれども、その配列が今日の正典とは違ふし、第100篇以前の詩は第93篇を除いてこの巻物に入っていない。そのうえこれらの「正典詩」の間に8篇の非正典的作品が挿入されているのである。こうして、この巻物は、ある人々——例えばエッセネ派——によって「正典」と認められた詩篇なのか、つまり今日一般に正典とされている詩篇とは別の正典詩篇なのか、それとも単にこの集団が礼拝の便宜上既存の正典詩篇にそれ以外の——その中には彼らが作ったものもあろう——作品を加えて編纂したものなのか、という問題が提起される(Goshen-Gottstein, Sanders II, p.138等を参照)。この問題にここで立ち入る余裕は無いが、われわれは Goshen-Gottstein らと共に、この巻物の第XVI 欄 1—6 行に詩篇 118 からの、順序と若干の語句とを変えた抜き書きと見られるものがあること、第XXVII 欄 2—11 行に列王記上 5 : 12 (=七十人訳、日本語協会訳 4 : 32) のソロモンの詩業頌を模したダビデの詩業についての散文的記述があること、非正典的作品の中には第 151 篇のように正典のいかなる文学類型にも属さぬ詩や第 154 篇のようにクムラン・エッセネ的背景を思わせる詩が含まれていること、などから、後者の説——典礼のための讃歌抄——に傾く。最後に Ps^a とされるのは、同じ洞穴から出た他の詩篇巻物の断片と区別するためである。

さてこの巻物所収の外典詩 7 篇のうち、われわれは既に詩篇 151, 154, 155 について日本語訳を試み、あわせて若干の考察を、主として言語形式の面についておこなった(松田 I, II)。この小論では、残る 4 篇のうち「ベン・シラの知慧」終章 (11QPs^a Sirach) を除く 3 篇を取上げる。「ベン・シラの知慧」については最近村岡崇光による日本語全訳(日本聖書学研究所編『聖書外典偽典 2, 旧約外典 II』東京 1977, pp. 67—207, 361—510)が刊行され、その中で本写本も参照されている。

ところで以下で扱う 3 篇は、これら以外の外典詩がこの巻物発見以前すでにギリシア訳ないしシリア訳で知られていたのと異り、この巻物とともに初めてその存在が知られた作品である。以下各篇につき、原本からの転字テキスト、日本語訳および解説、註解を掲げる。註解において松田 II と同様、句構成の面で旧約正典との異同をやや詳しく探ったのは、筆者の現在の関心がヘブライ語語彙論——もちろん文法特性の考察をも含めた——にあるからであろう。

讚歌その一 (11QPs^a Plea)

第XIX欄の現存部分は全行切れ目無く書かれており、これが一篇の詩の一部に相当するものであることは明らかである。われわれの巻物において各詩の境界は、少なくとも三分の一行以上の空白を置くことによって示されているからである。しかし各欄とも下方約三分の一が欠落しており、しかも上述のようにこの詩と同定すべきものをわれわれは現在いかなる形においても持っていないため、欠落部分の姿を推定することはできない。ただ、右隣の第XVIII欄に書かれているいわゆる詩篇 154 がそのシリア語訳から推定して第17行あたりで終わっていたと考えられるので、その下にすぐこの詩が書き起されていたとすれば、この詩は第XVIII欄の下から 5～6 行目から始まっていたものであろう。そして左隣の第XX欄は正典詩篇 139:8 の末尾の二語で始まっているから、われわれの詩は第XIX欄の19～20行目で終り、その下に 139:1—8 が書かれていたことはほぼ確実である。とすれば現在かろうじて18行だけ残っている本詩篇は、本来は24—26行の長さを持っていたものと推定される。Sandersはこの詩に Plea for Deliverance という題を付け、11QPs^a Plea と呼ぶ。以下の転字本文において行中の小数字は原文の行を、左端の括弧でくくった数字は引照の便宜上筆者がつけた節の番号を示す。

- (1) 'kj lw' rmh twdh lkh げに蛆虫は汝を称^なえず、
 wlw' tspr ḥsdkh twl'ḥ 汝の慈しみを虫は語らぬ。
- (2) ʰhj hj jwdh lkh 生ける者、生ける者こそ汝を称え
 jwdw lkh kwl mwttj rgl 足よろめく者もみな汝を称える。
- (3) bhwdj'kh ʰḥsdkh lhmh 汝がみ慈しみを彼らに知らせ、
 wšdqtkh tskjlm 汝の義を彼らに悟らせ給うとき。
- (4) kj bjdkh npš kwl ʰhj げに生けるすべての者の魂はみ手
 の中にあり、
 nšmt kwl bsr 'th ntth すべての肉の息は汝が与え給うた。
- (5) ʰsh ʰmnw JHWH ʰktwbkh われらをあしらい給え、ヤハウエ
 よ、汝の善意のままに、
 krwb rḥmjkh 汝の豊かな憐れみのままに、
 wkrwb šdqwtjkh また汝の豊かな救いの業のままに。
- (6) šmʰ ʰJHWH bqwl 'whbj šmw ヤハウエはみ名を愛する者たちの
 声を聞き、
 wlw' ʰzb ḥsdw mhmh 彼らにみ恵みを拒み給わなかった。
- (7) ʰbrwk JHWH ʰwšh šdqwt ほむべきかなヤハウエ、救いの業
 をなし給うかた、
 mʰtr ḥsjdjw ʰḥsd wrḥmj 其の聖徒らに恵みと憐れみとを冠^{こうむ}
 らすかた。
- (8) š'gh npšj lhll 't šmkh わが魂は叫んだ、み名を讃うべく、
 lhwdwt brnh ʰḥsdjkh 歓声の中にみ恵みを称うべく、
- (9) lhgdj 'mwntkh 汝の真実を述べるべく、
 lthltkh 'jn ḥqr きわみ無き汝の讚美のために。
- (10) lmwt ʰhjtj bḥt'j 私は死に瀕していた、わが罪のゆ
 えに。

- w^cwwnwjtj lš'wl mkrwnj わがもろもろの咎は私を^{よみ}冥界に売り渡した。
- (11) wtsjlnj ¹¹JHWH
 しかし汝は私を救い出し給うた、
 ヤハウエよ、
 krwb rḥmjkh 汝の豊かな憐れみのままに、
 wkrwb šdqwtjkh また汝の豊かな救いの業のままに。
- (12) gm 'nj 't ¹²šmkh 'hbtj 私もまたみ名を愛し、
 wbslkh ḥsjtj 汝の蔭に逃れたのだ。
- (13) bzkwrj ^cwzkh jtqp ¹³lbj
 み力を想い起すときわが心は強い、
 w^cl ḥsdjkh 'nj nsmktj
 み慈しみに私は支えられたのだ。
- (14) slḥh JHWH lḥt'tj
 赦し給え、ヤハウエよ、わが罪を。
¹⁴wṭhrnj m^cwwnj
 わが咎から私を潔め給え。
- (15) rwḥ 'mwnh wd^ct ḥwnnj
 真実と知識との霊を私に恵み給え、
 'l 'tqlh ¹⁵b^cwwh
 廃墟の中で私が恥を蒙ることの無きよう。
- (16) 'l tšlt bj štn
 サタンと汚れた霊とが私を支配することの無きよう。
 wrwḥ ṭm'h
- (17) mk'wb wjśr ¹⁶r^c
 苦しみや悪しき思いが
 'l jršw b^cšmj
 わが骨を占めること無きように。
- (18) kj 'th JHWH šbhj
 げに汝こそ、ヤハウエよ、わが誉れ。
 wlkh qwtjtj ¹⁷kwl hjwm
 汝をひねもす私は待ち望む。
- (19) jśmḥw 'hj ^cmj
 わがはらからは私と共に喜び、
 wbjt 'bj ḥšwmmjm bḥwnkh
 汝の恵みに打たれたわが父の家も
- (20) []
¹⁸[]lm 'śmḥh bkh [とこ]しえに私は汝を喜ぼう。

ここに掲げた現存部分に関する限り、ヤハウエは、6—7節で三人称で言及されるほかは、終始二人称で語りかけられている。正典詩篇でも、ヤハウエが一貫して二人称で言われている詩は比較的少なく、とくにわれわれのこの巻物に限って言えば、この作品の次に書かれている139、および141、143だけである。いちばん多いのは三人称のみによって言及されているもので、例えば110—114、116—118、120—122、146—150がそうである。この他の詩の大部分は、二人称と三人称の混合である。さてわれわれの詩に帰って、もう一度人称に注目すれば、一人称単数——即ち詩人自身——は8節で初めて現れ、以下終りまで続く。この表現面の特徴に応じて、内容もここで二分され、7節以前は一般的な讃美の歌、8節以下は個人の嘆きと感謝の歌、と一応言うことができる。動詞の文法形態に注目しつつもう少し細かく見ていくと、1—3節では未完了形を用いて、生ける人間のみが神を讃美し得ることが、4節では名詞文と完了形の動詞文とによって、その理由がやはり讃美の気持で歌われ、5—7節で「われわれ」「み名を愛する」「聖徒ら」の願いが祈られる。8—10節では、完了形によって、詩人が罪の故に死に臨んでいた時にも神を讃美していたことが回顧され、11—13節でも同じく完了形で、救いの業が語られる。14節以下再び命令形が現れて、罪が赦され恩恵が与えられるよう祈られる。一つの詩におけるかかる突然の転調は、正典詩にもしばしば認められるものである。

1. 「蛆虫」rimmāと「虫」tōlē^aのパラレルについては、ヨブ25：6「まして蛆虫なる人間、虫なる人の子はなのおさらのこと」、イザヤ14：11「汝(バベルの王)の栄光、汝の琴の音も今や冥界にまで落された。汝の下には蛆虫がひろがり、虫が汝を蔽う」を参照。ここでは、ヨブにおけるような人間の代名詞ではなく、次の「生ける者」と対立して、イザヤにおけるように死者の比喩である。イザヤ 38：18a kī lō' š'ōl

tōdekā, māwet jhallekā 「げに冥界は汝を称えず死は汝を讃えない」を参照。この文の前半は否定辞 lō' が動詞の前でなく主語の前に置かれるというやや破格の構文を示す点においても、われわれの詩の 1 節前半と同様であって、作者がイザヤのこの個所を模したのであることはほぼ確かである。2 節前半がイザヤのこの個所に続く 19 節 a と後述の点を除いて同じであることも、この推定を裏付ける。「蛆虫が知らせる」、「虫が語る」という句および「知らせる」と「語る」との平行は、いずれも正典には見出されない。

2. 前半はイザヤ 38 : 19 ḥaj ḥaj hū' jōdekā の引用。本詩の原文で hū' が一旦書かれながら後でこれを抹消した形跡がある (Sanders) ことは、1 節におけると同じく「汝を」が動詞に附属する接尾人称代名詞 -kā によってでなく前置詞 + 接尾人称代名詞 (lkā) によって表されていることと併せて、作者の意識的改竄を想定させる。後半の mwttj は正典、クムラン写本を通じて初出の形であるが、 $\sqrt{mw\bar{t}}$ の能動分詞複数構成形と解釈する。マソラ本で māṭē と読まれている形である。

3. 「知らせる」 hwdj° と「悟らせる」 tśkjl は、前者が不定詞であるのに対し後者は未完了形で文法的機能は相異なるが、意味的に平行である。後者は śkl の hif'il 形で、ここではダニエル 9 : 22 'attā jāšātī lhaškilkā bīnā 「今わたしは汝に判断を教えるため出て来た」と同じく二重目的を取っている。Sanders は 'and by thy righteousness thou dost enlighten them' と訳す。「慈しみを知らせる」と「義を悟らせる」はいずれも正典には無い表現。

4. ヨブ 12 : 10 'ašer bjādō nepeš kol ḥaj 'wrūaḥ kol bśar' 'iš 「すべて生ける者の魂はその手の中にあり、すべての肉なる人間の霊も」からの引用であろうが、後半の名詞句はここでその後に 'th ntth 「汝は与えた」を加えられたため、目的句になっている。またヨブの rūaḥ をここでは nšmt 「息」に代えた結果、「肉の息」という正典には

ない名詞句が生じている。「霊」 rūah と「息」 nšāmā はイザヤ 42 : 5
ヨブ 4 : 9 33 : 4 等でパラレルをなす類義語なので、類推によって
この場合もおそらく意識的に改められたのであろう。

5. 「…のままにあしらせ」 °ašeh k... という命令形が「善意」 tūb,
「豊かな憐れみ」 rōb raḥmīm, 「豊かな救いの業」 rōb šdāqōt と統合す
る例は旧約には無い。しかし参照 : krōb raḥmekā mhē pšā°aj 「汝
の豊かな憐れみに従ってわが過まちを消し給え」(詩51 : 3), kkol šid-
qōtekā | jāšob-na' °appkā waḥmātkā 「汝のすべての救いの業に従
って、汝の怒りと憤りとを引込めて下さい」(ダニエル 9 : 16) 等。

6. 「御名を愛する人々」 °ohabē šmō は詩 5 : 12, 69 : 37, 119 : 132
を参照 (Sanders)。「恵みを拒まぬ」 lō' °āzab ḥesed¹ は創世記 24 : 27
ルツ 2 : 20 を参照。

7. 「救いの業をなすヤハウエ」 jhwh °wšh šdqwt については詩
103 : 6 を、また「恵みと憐れみを冠らせる方(ヤハウエ)」 m°tr ḥsjdjw
ḥsd wrḥmjm という表象については同じく詩 103 : 4 (ham°attrēkī
ḥesed wraḥmīm) を参照。この詩篇の個所におけると同じく °tr (pi.)
は二重目的語 (ḥsjdjw, ḥsd wrḥmjm) を取っている。

8. 「魂が叫ぶ」 š'g npš という表現は本詩独自。š'g は旧約では獅
子の咆哮を表す動詞であり、比喩的には主に悪人について用いられ、
詩 38 : 9 「私は力尽き、甚だしく打たれ、わが心の呻きから叫んだ」の
ように絶望からの叫びを表すことはあっても、本詩のように讚美の叫
びを表すことは無い。「恵みを称える」 lhwdwt... ḥsdjkh については
詩 107 : 8, 15, 21, 31 の反復句 (jōdū ljhwh ḥasdō) を参照。ただしこ
の句に「歓声の中に」 brnh という副詞句が挿入される例は正典には無
い。参照 : 詩 107 : 22 「感謝の犠牲 (zibhē tōdā) を捧げ、歓声の中に
(brinnā) その御業を語れ」。

9. 「汝の真実を述べる」 は参照 : 92 : 3 lhagīd babōqer | ḥasdekā

we'emūnātkā balēlōt 「あしたに汝の慈しみを、夜な夜な汝の真実を述べる」。lthltkh は 8 節とのパラレルを考えて「汝の讃美のため」と訳したが、「汝の榮譽のため」とも訳せよう。詩 145 : 3 wligdulātō 'ēn hēqer 「きわみ無きその大いさのために」を参照。

10. 「罪の故に死に瀕する」lmwt hjjtj bhṭ'j も独自の表現であるが、民数 27 : 3 kī bhēṭ'ō mēt 「彼はその罪の故に死んだ」を参照。本節後半は前半と意味上パラレルをなすが、この「咎が人を冥界に売り渡す」という表現も正典には無い。

12. 'hb 「愛する」は、分詞として「み名」と統合する例は正典にある(上記 6 節註参照)が、このように定動詞で「み名」を目的語とする例は無い。6 節で一般的に「み名を愛する者たち」の声をヤハウエが必ず聞くと述べたことを承けて、ここで「私もまた」gm 'nj その一人であると主張しているのであろう。

13. 「強い」と訳した jtqp の語根 tqp は正典ヘブライ語では「打勝つ」という他動詞としてのみ現れる。ここでは自動詞であることは明らかなので jitqap と読む。聖書アラム語では pe^oal 形で自動詞としてのみ現れ、例証されるその完了形 tqip から未完了形を類推すればやはり jitqap である。ダニエル 5 : 20 で rūah 「霊」を主語にとるが、そこでは「高ぶる」という意味である。後半は詩 71 : 6 「私は母の胎以来汝に支えられた」を参照 (Sanders)。本節も表現は独自であるが、内容的には詩 28 : 7 等を思わせる。

14. 表現、内容ともエレミヤ 33 : 8 「私は彼らが私に犯したすべての咎 (cāwōn) から彼らを潔め (thr), ……彼らのすべての咎を (lkōl-cāwōnōtēhem) 私は赦す (slh)」に最も近い。slh lhṭ't 「罪を赦す」という表現は王上 8 : 34, 36 エレミヤ 36 : 3 等に見える。

15. 「真実と知識の霊」はイザヤ 11 : 2 rūah ḥokmā wubīnā rūah cēsā wugbūrā rūah da^oat wjir'at jhwh を参照。動詞 hnn が二重目

的に支配する例は詩119：29等に見られる。「恥を蒙る」は 'tqlh を qlh の hitpa^cel 形未完了と読む。この語根は正典では nif^cal 形と hif^cil 形でのみ現れる。

16. 「支配する」šlt は伝道の書、エステル、ネヘミヤに現れる後期ヘブライ語で、ここのように「サタン」や「汚れた霊」を主語とする例は正典には無いが Levy によるとタルムードの中に rwh r^ch šwlth bw 「悪い霊が彼を支配する」(Šabbat. 82a) という句がある。「汚れた霊」という名詞句も旧約には無いが, πνεῦμα ἀκάθαρτον (マルコ 1:23 等多数) を参照。

17. 「悪しき思い」jšr r^c は創世記 8：21 jēšer lēb hā'ādām ra^c minn^curāw 「人の心の思いはその若い時から悪い」を参照。šm 「骨」の複数形の「拡大された意味」については詩 6：3 等を参照。「占める」jrš が前置詞 b を支配する例は正典には無く、土地、町、家、民族等の具象物を表す名詞を直接目的語として支配する。ここのように人間以外のものを表す語を主語とする比喩的用法も正典には見出せない。

18. šbah 「誉れ」はタルグム以来例証される名詞で、その動詞形は旧約にも現れる。後半についてはイザヤ 33：2 jhwh ḥonnēnū, lkā qiwwīnū 「ヤハウェよ我らを憐れみ給え、我らは汝を待ち望む」を参照。

19. 前半も後半も正典には無い表現。最後の語は、イザヤ 30：18 の laḥnankem (MT) が 1QIs^a で lḥwnkm と書かれていることに拠って、b(前置詞)+ḥnn(不定詞)+kā(接尾人称代名詞)と読む。

讚歌その二 (11QPs^a Zion)

第XXXII欄の1行目後半から15行目までがこれだけで一つの詩を構成するものであることは、次の点から明らかである。すなわち、まず書写形態の面では、1行目に前欄からの続きで「ベン・シラの知慧」

51:30の最後の2語が書かれたあと、約三分の一行分の空白を置いて新たな文が始まり、15行目まで続き、16行目以下には正典詩篇93が書かれている。次に詩形式の面で、この詩の各節(ないし句)は、その長さは不揃いながら、最初の各文字がアルファベット順に並んで、いわゆる折り句 acrostic を構成し、それが' (アレフ) から t (タウ) まで揃っているのである。Sandersはこの詩を Apostrophe to Zion と呼び、11QPs^a Zion と略記する。

- | | | |
|-----|--|-----------------------|
| (1) | 'zkwrk lbrkh sjwn | 私は汝を想い起す、シオンよ、祝福のために、 |
| | bkwl mwdj ² nj 'hbtjk | わが力の限り私は汝を愛する。 |
| | brwk l ^c wlmjm zkrk | 祝されよ、永遠に、汝の思い出は。 |
| (2) | gdwlh tqwtk sjwn | 大いなるかな、シオンよ、汝の希望は、 |
| | wšlwm ³ wtwłht jšw ^c tk lbw' | 平安と汝の救いの望みとは必ず来る。 |
| (3) | dwr wdwr jdwrw bk | 代々の人が汝の中に住み、 |
| | wdwrwt ḥsjdm ⁴ tp'rtk | 代々の聖徒らが汝の榮譽となるであろう。 |
| (4) | hmt'wjm ljwm jš ^c k | 汝の救いの日を望みこがれる者、 |
| | wjśjśw brwb kbwdk | 彼らをして歓喜せしめよ、汝の豊かな栄光を。 |
| (5) | zjz ⁵ kbwdk jjnqw | 汝の栄光の乳首を彼らは吸い、 |
| | wbrḥwbwt tp'rtk j ^c ksw | 汝の壮麗なる広場で誇り歩くであろう。 |
| (6) | ḥsdj nbj'jk ⁶ tzkwrj | 汝の預言者達の信実を汝は想い起し、 |

- wbm^cšj ḥsjdjk ttp'rij 汝の聖徒らの業を汝は誇るだろう。
- (7) ṭhr ḥms mgwkw 汝の中から暴逆を彼は追拂い給うた、
- šqr ʔw^cwl nkrtw mmk 虚偽と不正は汝から断たれた。
- (8) jgjlw bnjk bqrbk 汝の息子らは汝の中で喜び歌い、
- wjddjk 'ljkw nlww 汝の愛する者達が汝に結びつく。
- (9) ʔkmh qww ljšw^ctk いかにも彼らは待ち望んだか、汝の救いを、
- wjt'blw ʔljkw tmjk 汝のため嘆き悲しんだか、汝の全き者達は。
- (10) lw' twbd tqwtk ʔsjwn 滅び失せない、シオンよ、汝の希望は。
- wlw' tškh twḥltk 汝の望みは忘れ去られない。
- (11) mj zh 'bd šdq 誰が正しくして滅び、
- 'w mj zh mlṭ ʔb^cwlw また誰が不正のうちに生きながらえたか。
- (12) nbḥn 'dm kdrkw 人はその道に従って験され、
- 'jš km^cšjw jštlm 人間はその諸々の業に従って報いられる。
- (13) sbjb nkrtw ʔsrjk sjwn 四方で断ち切られた、シオンよ、汝の敵は。
- wjtpzrw kwl mšn'jk 汝の仇はみな散らされた。
- (14) ʔrbh b'p tšbḥtk sjwn 馨しい供え物だ、シオンよ、汝の讃歌は、
- ʔm^clh lkwl tbi 全地に高くあがって。
- (15) p^cmjm rbwt 'zkwrk lbrkh いくたびも私は汝を思い起す、祝福のために、

- | | |
|--|--|
| bkwl lbbj 'brkk | わが心の限り私は汝をほめたたえる。 |
| (16) ¹³ šdq °wlmjm tšjgj
wbrkwt nkbdjm tqblj | 永遠の義に汝が到達するよう、
貴人達の祝福を汝が受けるように。 |
| (17) qhj hzwn ¹⁴ dwbr °ljk
whlmwt nbj'jm ttb°k | 受けよ、汝について語られた幻を、
汝のために求められた預言者らの
夢を。 |
| (18) rwmj wrhbj šjwn
¹⁵ šbhj °ljwn pwdk | 高まれ、拡がれ、シオンよ、
ほめ称えよ、至高きかた汝の贖い
主を。 |
| tšmḥ npšj bkbwdk | 喜ばしめよわが魂に、汝の栄光を。 |

「シオンよ」という呼掛けが六度も繰返されることから分るように、この詩は終始シオンすなわち失れた町エルサレムを対象としており、そのことと関連して、「ヤハウエ」ないし「神」という語が一度も出ないという点で、正典詩篇のみならずこの巻物所収の外典詩篇の中でも、特異な作品である。ちなみに現在のヘブライ語正典詩篇で jhwh の代りに 'elōhīm が出るものは、いわゆる「エロヒム歌集」に属する43—45, 49, 51—53, 57, 60—63, 65—67, 82の各篇で、これらにおいてはしかし多くの学者が 'elōhīm を jhwh と読み換える。この他77, 150の二篇では jah のみが、114では 'elōah が、用いられる。これ以外の詩篇では全部 jhwh が現れるのである。さて Sanders はこの詩を「イザヤ54:1—8 60:1—22 62:1—8 で周知のスタイルによる、シオンへの呼掛け」と言うが、イザヤのこれらの個所では、シオンがヤハウエの妻であり、神の栄光であることが明言されているのに対し、このわれわれの詩ではそのことはもはや自明のこととして言外に置かれているのである。わずかに最後に °eljōn「至高者」なる語が出て来、ま

たわれわれの解釈に拠れば7節で、三人称単数の動詞完了形においてヤハウエが暗示されていると見られる。

内容的には1—6節、7—13節、14—18節の三部形式から成っている。第一部ではシオンへの愛が披瀝されたあと、来るべき救済と栄光とが望まれ、第二部では動詞が完了形に変わってシオンが既に正しくされ潔められていることを歌う。ここで「汝(シオン)の息子ら」「汝の愛する者達」「全き者達」は、少なくともこの巻物の置かれた状況では、クムラン共同体の成員を指したのであろう。第三部では再び、しかしより積極的に、シオンが祝福され、聖書の預言がシオンに対して実現するよう祈られ、「贖い主」への讚美が奨められて終る。

1. この背景については、例えば詩137:6を参照——「(エルサレムよ)わが舌は上あごにくっついてしまうがよい、もし私が汝を想い起さぬなら。もし私がエルサレムをわが頭に喜びとして冠^{かむ}らせないなら」。'zkwrk (zkr の qal, 'ezkōrēk) を Sanders は 'zjkrk と読みながら I remember thee と訳し、註で 'I cause thee to be remembered' と説明する。しかし Sanders がここで引照しているイザヤ62:6—7で hammazkīrīm は「(ヤハウエに)想い起させる者たち」であって、想起すべき対象がシオンであることは本詩の場合と共通だが、他の文脈は異なるし、ヒフィル形に読みながら結果としてカル形と同じ意味になるのもおかしい。初めからわれわれのようにカル形とした方がよいのではないか。原文の書体で w と j の判別が困難であるからにはなおさらそうであろう (Sanders, p.9 参照)。mwd (= MT. m'ōd) が「力」という名詞として用いられている例は、申命 6:5 (w'āhabtā 'ēt jhwh 'elōhēkā bkol-lbābkā wubkol-napškā wubkol-m'ōdekā), 列王下 23:25 の 2 例だけで、いずれも定式化した表現である。zkr 「想起」が brk 「祝福する」の対象となる例はここだけ。

2. 「希望」を意味する二語 tqwh と twhlt は何れも知恵文学に多く

出る。この中箴言10：28と11：7とで両語が対になっている。「希望が大きい」, 「救いの望み」, 「平安と望み」, いずれも正典には無い句である。前置詞1 + 不定詞が述語として、近い将来の必然的出来を表す用法は、ホセア9：13等に見られる。

3. *dwr wdwr* という名詞句は旧約に30例見出せるが、ここのように動詞の主語となる例は無い。「聖徒ら」*hšjdm* は11QPs^a 154, Pleaにも出、既述のようにこの巻物の所有者は自分達自身と同定したのであろう。「代々」*dwrwt* が*hšjdm* を支配することも、*tp'rh*「榮譽」の主語となることも正典に例証されないが、後者がシオンないしエルサレムについて言われる例はイザヤ52：1 60：19 62：3 エレミヤ13：20 エゼキエル16：17, 39を参照。

4. 「望みこがれる」(*'wh* の *hitpa^eel*) は、旧約では本詩の場合と異なり、悪を含意していることが多い。例えば箴言23：3, 6 24：1等がその典型だが、アモス5：18 *hōj hammit'awwim 'et jōm jhwh*「禍いなるかな、ヤハウエの日を望みこがれる者たち」においても同様である。「救いの日」, 「豊かな栄光」は正典に無い。「栄光」については「大きい」*gdwl*と言われるのが普通(詩21：6 138：5)。

5. 前半についてはイザヤ66：11参照 (Sanders) : *lm^en tjnqw wšb^etm mšd tnhmjh, lm^en tmšw wht^engtm mzzj kbwdh*. われわれの巻物で *zjz* の前に普通以上の空白があるのは *m* を後で消したためか。*j^eksw* の意味はこの動詞が現れる唯一の個所イザヤ3：16 (*bnōt šijōn.... braglēhem t^eakkasnā* 「シオンの娘らは…足の飾りをチャラチャラ鳴らして歩く」) に拠るが、ここでは4節の「待ちこがれる」と共に含意が転換されていると解釈して、「誇り歩く」と訳した。Sandersはこの語根と伝統的に関連づけられているアラビア語 *'ikās*「(駱駝の)足枷」から 'tattle, toddle' という意味を引き出し、前半の乳児の比喩とのパラレルを考える。

6. ḥsdj nbj'jm, m^cšj ḥsjdjm とともに正典には無い表現。前者を Sanders は 'the merits of thy prophets' と訳しながら、註において、「イザヤ55：3および歴代志下6：42 ḥsdj dwjd も考えられる、ここではおそらく預言者たちを通して与えられたエルサレムに対する希望と回復との約束を意味しているのであろう」と言う。拙訳は後半とのパラレルを重視した結果である。

7. thr を Sanders は 'Purge' と命令形で訳し、註で「命令の意味の不定詞か。あるいは thrij または tōhar と読む？」とする。われわれは後半の完了形動詞 nkrtw とのパラレルを考えて pi^cel 三人称単数男性の完了形 (ṭihar) と読み、主語はヤハウエとする。Sanders はこれを命令の意味に解したため、nkrtw を未来のこととして 'will be cut off' と訳さざるを得なくなっている。この7節は13節の同じく完了形による動詞文と対応するものであろう。完了形といってももちろん客観的な実現を述べるものではなく、詩人の主観において確実な出来事として扱われているのである(詩3：8 36：13等参照)。mgwk 「汝(f.)の中から」は後半の mmk 「汝から」と対をなす。gw はアラム語 gw (:gō' ダニエル3：25, 26等)からの借用語(*gaw)で、「内部」の意(HAL)。Sanders はイザヤ51：23を引用するが、その gēw は「背中」で、これとは別の語であろう。「虚偽と不正」という名詞句は旧約には現れない。

8. われわれの解釈によれば、7節のこの結果として言われているのである。jgjlw bnjk はヨエル2：23 詩149：2を参照(Sanders)。jdd 「愛する者」は、正典ではヤハウエとの関係において用いられていて、このように「シオン」のそれを指す例は無い。また bn 「息子」とパラレルになることもない。

9. jšw^ctk はシオンが解放されること。参照：イザヤ62：1 「シオンのために私は黙せず、エルサレムのために安んじない。その義が輝く

光のように現れ、その救い jšw^cth が松明のように燃えたつまでは」。wjt^cblw °ljk についてはイザヤ66：10を参照 (Sanders)。しかし「全き者」tm を主語とする例は正典に見られない。このtm は11QPs^a 154 に現れ1 QS 等 (例えば1 QS 4：22 tmjmj drk 「道の全き者達」) にも頻出しクムラン文書の鍵語の一つであるが、このように人称代名詞が接尾するのはここだけである。

10. tqwh と twhlt のパラレルは2節に既出。その註で挙げた箴言10：28 11：7にこの「希望が減びる」という表現も現れる。「滅びない」と「忘れられない」のパラレルは、詩9：19を参照：「貧しき者が永久に忘れられることはなく、苦しむ者の希望 tqwt がいつまでも滅びていくことはない (ギリシア訳等により lō' を補う)」。

11. mlṭ の qal 形はここだけなので、Sanders はアッカド語 balātu から 'survive' という意味を引き出す。しかしそのような通時の手段を弄せずとも、共時的にこれの pi^cel 形の意味「(死ぬべきところを) 生きながらえさせる、逃れさせる→救う」から qal 形の自動詞としての意味「生きながらえる、逃れる」が推定される。「正しくして滅びる」という表現も本詩独特。

12. 原本では 'jš の ' と j の間に一字分の空白があり、一旦 'nwš と書いて訂正したらしい (Sanders)。韻律上の理由か。それともできるだけ '純正' なヘブライ語を書こうという書写生の努力か。'nwš はヘブライ、アラムに共通だが、jš はヘブライ語独自のだから。jš と 'dm とのパラレルは例えば詩62：10を参照：'ak hebel bnē-'ādām, kāzāb bnē 'iš. jštlm は šlm の hitpa^cel 形未完了形であろう。そうすると最初の ṇbhñ が完了形なので時制がパラレルでなくなるが、これはこの詩の折り句構造に合わせるため (11節が m で始まる) かも知れない。Sanders は (ユダヤ)「アラム語の ithpe^cil からの派生」を考えるが、そうだとすると j- で始まる形はやはり未完了である。

13. 「敵」šr と「仇」mśn' のパラレルは申命32：41 詩44：8, 11 81：15等を参照。動詞 pzt は正典では pi^cel 形「追拂う」のみ。wjtptzrw という hitpa^cel 形はミシュナ文献にも稀だという (Sanders)。

14. ʿrbh b'p は直訳すれば「鼻に快い」。tšbhtk の語根 šbh「讚美する」はヘブライ語にも入っている(詩63：4で brk と, 117：1 147：12で hll と, 145：4で ngd, hi. とそれぞれパラレル) アラム語で, この名詞 (tušbhā) はタルグムに例証される (Jastrow)。-k「汝の」は一応 Sanders の訳 'Praise from thee' に従って「主格的属格」と考えられるが, 次節との関連から「対格的属格」として「汝への讚歌」と訳すことも可能であろう。ma^clā (副詞) + 1 という結合は他に例証されないが, その意味は mimma^cal 1「の上に」(創22：9等) から類推できる。Sanders が註で 'm'lh b'p. Noun? Adverb?' としているのは意味不明。b'p は上述のように ʿrbh と統合しているのである。

15. p^cmjm rbwt という表現は詩106：43 伝7：22を参照。'zkwrk については1節註を参照。

16. šdq ʿwlmjm については, ダニエル 9：24「永遠の義 (šdq ʿlmjm) をもたらすため, 幻 (hzw) と預言者 (nbj) とを封ずるため」を参照。この hzw と nbj' は17節に出るから, 作者はこのダニエルの個所を意識していたのであろう。「義に到達する」という表現はここだけ。nkbjdm について Sanders は, 同じくシオンについて言われ17節の dbr (pu^cal) も共に出る詩 87：3「神の都よ, 汝の中で尊きことども (女性複数) が語られる (nikbādōt mdubbār bāk)」を参照する。しかしここでは男性複数だから「貴人達」と訳す。旧約正典では brkh はこのように「受ける」qbl (pi.) ものではなく, 「取る」lqh ものである(列王下5：15等)。

17. 「幻を受ける」lqh hzw という表現も正典には無い。dbr の pu^cal 形は正典では2例しかなく, ここのような完了形 [dubbar] は例

証されない。この文のように関係詞 'ašer の無い 'asyndetic relative clause' はむしろ正典へブライ語詩文の特徴であって、ラビ文献には無いため、クムラン本のイザヤ書では 'šr を加筆した例もある。例えば 48 : 17 MT : bdrk tlk = 1QIs^a : bdrk 'šr tlk (Kutscher, p. 431)。「預言者の夢」は正典に無いが、サムエル上 28 : 6, 15 で ḥalōmōt, 'ūrīm, nbī'im が並置されている。ttb^ck は同定困難な形であるが、[titbā^cūk] と読み、b^ch 「求める」の hitpa^cel, 未完了, 三人称女性複数 + k (二人称女性単数) と解する。三人称女性複数の未完了形は titbā^cēnā となるべきであるが、接尾人称代名詞の前ではとくに、三人称男性複数と接頭辞の t/j においてのみ対立する形が現れることもある (Gesenius-Kautzsch § 60a)。接尾辞 -k は Sanders に従って「言及の与格」とする。

18. rwmj, rḥbj という女性の命令形は旧約に例を見ないが、シオンに対して言われた類義の命令は、イザヤ 51 : 17 「目をさませ (hit^cōrri), 目をさませ, 立て (qūmī), エルサレム」, 52 : 1 「起きよ (ūrī), 起きよ, 汝の力を着よ, シオン, 汝の栄誉の衣を着よ…」, 60 : 1 「立て (qūmī), 光をはなて (ōrī), …」, 54 : 2 「汝の天幕の場所を広くせよ (harḥībī), …」を参照 (Sanders)。šbhj は詩 147 : 12 šabbḥī jrūšalaim 'et-jhwh, hallī 'elōhaik šijōn を参照。pōdeh 「贖う者」という分詞形は詩 34 : 23 で jhwh の述語であるが、'ljwn 「至高者」との同格の例は無い。これが šbh の目的語となる例も同様。「魂が喜ぶ」という表現については参照：詩 86 : 4 šammēaḥ nepeš 'abdekā 「汝のしもべの魂を喜ばせ給え」。

讚歌その三 (11QPs^a Creat.)

第 XXVI 欄は 1—3 行に詩篇 149 : 7—9 が, 4—7 行に詩篇 150 の全篇が書かれたあと, 10 行目以下に本讚歌が切れ目なく書かれている。

15行目は若干の語が辛うじて読取れるが、16行目以下は完全に欠落しており、どこでこの詩が終っていたか分らない。しかし次の第XXVII欄1行目にサムエル下23：7の後半が書かれ、そのあとにダビデ詩作頌ともいべき散文的叙述(この日本語訳は松田 Ip. 25に掲載)があるので、サムエル下23章の引用はおそらく「ダビデの最後の言葉」の全部を含んで1節の a ないし b から始まっていたと察せられる。それは第XXVI欄に書いて大体9—11行を要する長さである。とすると、本欄も本来25行書かれていたはずであるから、本讃歌は15行目あたりで終っていた——つまり、現存部分是最終部に欠落はあるものの殆んど完全な一篇の詩の姿を呈していると言える。Sandersの表題は Hymn to the Creator, 略号は11QPs^a Creat. である。

- | | | |
|-----|--|--|
| (1) | °gdwl wqdwš JHWH
qdwš qdwšjm ldwr wdwr | ヤハウエは大にして聖にいます、
代々にわたって聖の聖にいます。 |
| (2) | lpnjw hdr °jlk
w'hrjw hmwn mjrm rbjm | み前には栄光が進み、
み後には多くの水のどよめき。 |
| (3) | ḥsd w'mt sbjb pnjw
'mt °wmšpṭ wšdq mkwn ks'w | み顔のまわりには恵みとまこと、
まことと公正と義とが御座の
支え。 |
| (4) | mbdjł 'wr m'plh
šḥr hkjn bd'ṭ °lhw | 光を闇からわかち、
曙を設け給うた、み心の知によっ
て。 |
| (5) | 'z r'w kwl ml'kjm wjrnw
kj hr'm 'ṭ 'šr lw' jd'w | 時にすべての御使いは見て歓呼し
た、
彼らの知らぬことを示し給うたの
で。 |
| (6) | °m'ṭr hrjm tnwbwt | 山々に実りを冠らせ給うかた、 |

- 'wkl t̄wb lkwl hj 生けるすべての者の善き糧として。
- (7) brwk °wšh 14'rs̄ bkwhw ほむべきかな、み力によって大地
を作り、
mkjn t̄bl b̄hwkmtw 知慧によって世界を堅くし給うか
た。
- (8) btbwntw nth šmj̄m その悟りによって天を延べ、
wjwš' 15[rwh] m'w[šrwtjw] [風を] [御庫] から出し、
- (9) [brqjm lmt̄]r °šh [稲妻を雨のために] 作り、
wj°l n̄sj'[jm m]qsh [rs̄] 雲[たち]を[地]の果[から]上らせ
給うた。

創造主としてのヤハウエへの讚歌であることは一見して明らかである。形式的には、韻律の不規則さ、文体の不統一が目立つ。すなわち、1—4節は名詞文が連なり定動詞は二つ(jlk と hkjn)しか出て来ないのに対し、5節では四つの定動詞が現れる。6—7節は再び分詞を用いた名詞文となり、8—9節は動詞文である。動詞時制は、2節の jlk が未完了形である他は全部完了形ないしワウ接続未完了で、名詞文と相俟って全体に力強い印象を与えるのに役立っている。前の二篇の讚歌と異なり、旧約正典にそのまま見出される成句が多く、ことに7—9節はエレミヤ10:12—13 (= 51:15—16)の各句によって構成されている。このエレミヤの個所の13節が最初の一文節を除き詩135:7とほぼ等しいことは言うまでもない。ところで Sanders は本詩8—9節の配列順序がエレミヤや詩135におけるよりも 'better' であるとして、次のように推論する：「この素材は疑いも無くある祭儀的な創造者讚歌から出たものである。11QPs^aに入っているわれわれの詩は、エレミヤの素材が取られた元の知慧文学的讚歌の真本の一つである (represents an authentic text) 可能性が高い。一方詩135については

注意が必要で、ここには知慧への明示的言及が無く、おそらくQ以前のものである。これに従えば、まず詩135：7によって代表される非知慧文学的讃歌があり、次にその詩篇の句の順序を逆にし知慧の要素を加えた讃歌が作られた、われわれの詩はその代表である、エレミヤの当該箇所はそれをもう一度順序を逆にして作り替えたものだ、ということになる。しかし、構成句の順序が全く同一の詩135：7とエレミヤ10：13 aβ—bβとを、この部分に関しては配列順序が逆になっている讃歌に対し、一方はその前、他方はその後に成立した、とするのは如何にも不自然ではなからうか。われわれは詩135全体を旧約各個所からの借用句による編輯とする Gunkel (1929, *Die Psalmen*, p. 574) 以来の見解を参照し、われわれの讃歌の前半も正典からの若干の引用を含むことから、エレミヤをオリジナルと考える。

1. ヤハウエについて *gdwl*, *qdwš* ということがそれぞれ単独に言われることはあるが、このようにこの二つが結合される例は正典にはない。*qdwš qdwšjm* も新しい結合である。名詞を重ねた *qōdeš qodāšim* (出エジプト29：37等23例, = *qwdš qwdšjm* 1QS 8：5, 6, 8 9：6 10：4) からの類推であろう。名詞 *qōdeš* は、神に属するものとして「聖別」された人または人の作品を指し、神については用いられないからである。Sanders は詩89：6—8 ホセア12：1 ザカリヤ14：5 1QH 3：22, 35等を参照させるが、これらの個所では *qdōšim* が単独に現れ、おそらくホセアを除き、天使達を意味する。とするとこの表象は「天使の群—神々—の中で最も聖なる者」ということ。

2. 前半については詩96：6 *hōd-whādār lpānāw* 「尊厳と栄光がみ前にある」、詩97：3 *'ēš lpānāw tēlēk* 「み前に火が進み」を参照。後者は、動詞が主語の後に来る不規則な語順をわれわれの箇所と共有する。またその前の2節で「そのまわりには雲と暗闇、義と公正とが

御座の支え」とあり、本讃歌3節と酷似する。後半の hmwn mjrm rbjrm は 1QH 2:16 にそのまま見える。さらにエレミヤ10:13「彼が声を出せば天に水のどよめき hamōn majm」を参照。7—9節のエレミヤからの引用(上述参照)ではこの句だけが省かれている。

3. 2節註を参照。さらに詩89:15をも参照: šdq wms̄pt mkwn ks'k, ḥsd w'mt jqdmw pnjk「義と公正とが御座の支え、み顔には恵みとまことが先立つ」。われわれの詩では二人称が三人称に変えられている。

4. 前半の表現は独自であるが、内容は創世記1:4, 18参照: wjbdl 'lhjm bjm h'wr wbjn ḥḥšk「そして神は光と闇とを分けた」。一般に 'wr と対立するのは 'plh ではなく ḥšk である。後半は表現、内容ともエレミヤ10:12b (=本詩7b)が最も近い。Sanders の引用するホセア6:3 (kšḥr nkwn mws'w), 1QH 4:6 (wkšḥr nkwn l'wrtwm) は何れも表面的には似ているが、そこではヤハウエの出現が曙に譬えられているのであってわれわれの詩とは状況が異なる。

5. 前半についてはレビ9:24 wajjar' kol hā'am wajjārōnnū「民はみな見て歓呼した」を参照。後半については1QH 13:11 kj hr'jtm 't 'šr l' []「げに汝は彼らに [] ないことを示し給うた」を参照。

6. 前半の句および後半の「善き糧」という表現は何れも正典に見出せない。内容については例えば詩65:10—14を参照。

7—9. 最初の brwk を除き、エレミヤ10:12—13の引用(上述の註解前文を参照)。以下その本文を、本讃歌(Qと略記)の順序と対照させて、掲げる。12(Q7) °šh 'rṣ bkḥw mkjn tbl' bhkmtw (Q8) wbt-bwntw nḥ šmjrm 13(Qナシ) lqwl ttw (Q2b) hmwn mjrm (Qナシ) bšmjrm (Q9b) wj'lh nš'jm mqsh 'rṣ (Q9a) brqjrm lmr̄r °šh (Q8b) wjwṣ' rwḥ m'srtjw. 参照: 詩135:7 m'lh nš'jm mqsh h'rṣ brqjrm lmr̄r °šh mws' rwḥ m'wšrwjw. もっとも本讃歌の8節後半以下は

欠落が多く、正文批判の資料とはなり難い。順序だけでなく本文についてもエレミヤとの相異があったことは考えられる。

引用文献

- Gesenius-Kautzsch : Gesenius' Hebrew Grammar, 2nd English Edition rev. by Cowley. Oxford 1910.
- Goshen-Gottstein : The Psalms Scroll (11QPs^a), A problem of canon and text. Textus Vol. 5, 1966, pp. 22-33.
- Jastrow : Dictionary of the Targumim, the Talmud Babli and Yerushalmi, and the Midrashic Literature. 2 vols. 1903¹.
- Kutscher : The Language and Linguistic Background of the Isiah Scroll (1Q Isa^a). Leiden 1974.
- Levy : Wörterbuch über die Talmudim und Midraschim. 4 Bde. Berlin und Wien 1924².
- 松田 I : 「詩篇151」『オリエント』Vol. IX, No. 4, 1966, pp. 15—30.
- 松田 II : 「詩篇154, 155」『オリエント学論叢』掲載予定。
- Sanders : The Psalm Scroll of Qumrân Cave 11 (11QPs^a). Discoveries in the Judaeen Desert of Jordan, IV. Oxford 1965.
- Sanders II : The Dead Sea Scrolls—A Quarter Century of Study. The Biblical Archaeologist, Vol. 36, No. 4, 1973, pp. 110—148.

(1978, 11, 27)